あぶとアリジゴク

三上夏一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あぶとアリジゴク

【Ｎコード】
Ｎ３０５４Ｍ

【作者名】
三上夏一郎

【あらすじ】
或る家の軒下に巣をつくっていたアリジゴクはあぶと友達になり、人生を語り合う。しかしそれは、ほんの束の間の友情だった。

アリジゴクが、軒下に巣をつくりました。その上を一匹のあぶが飛んでいました。

「やあ。やけに嬉しそうじゃないか」アリジゴクが、頭の上をぶんぶん飛び回るあぶに向かって言いました。

「そりゃそうさ。やっとあの、暗くて臭い肥溜めから出られたんだもの」アリジゴクの上を、八の字を描いたり、とにかく自由に飛び回りながらあぶが答えます。「外の世界って、なんて明るくて素敵なんだろう！」

「ああ、ボクも早くそんな気分を味わいたいものだ」砂をハサミのような口ではね上げながら、アリジゴクが言いました。

「大丈夫。君だって成虫になれば、羽根が生えて飛べるようになるんだろ？」

「うん。でもボクたちは、大人になった途端死んじゃうんだよね」アリジゴクが妙に澄んだ声で言いました。

「何よこの成績！」

家の中から、人間の女性の怒鳴り声が聞こえてきました。

「うわまた始まったぞ」神妙な飛び方になったあぶが言いました。

「何なの、あれ？」アリジゴクが巣の底から顔を出します。でも、いくら首を伸ばしても、すり鉢のような巣の砂の壁と、その上に広がっている青空しか見えません。

その青空の真ん中に、あぶはホバリングして止まっていました。家の中を、うかがっています。「この家の子が、塾に行き始めたんだよ。どこかの、小学校を受験するんだって」

「言われたことは、ちゃんとやりなさい！」

雷鳴のような女性の声に、あぶは思わず三メートルばかり飛びのきました。

「エーン」
小さな女の子の泣く声が聞こえてきました。どたどたどた、と縁側の廊下を走る音が続きます。アリジゴクの巣はすぐその下にありました。
「かわいそうになあ」
「全くだね」またあぶが戻ってきました。「でも、あの女の子も、大人になったらきっとあんなお母さんになるんだろうな」
「そんなものかねえ」
アリジゴクが答えたその時でした。
「うわ！　汚らしいハエ！」
お母さんの声――続いてシューッという音。ぶん、という音がして、アリジゴクの巣の中にあぶがどさっと落ちてきました。初めてアリジゴクは、あぶの顔を間近で見ました。
「やられたよ」弱々しい声で、あぶが言いました。「殺虫剤だ――噂には聞いてたけど、ひどいもんだ」
「動けないのかい？」ぴくぴくけいれんしているあぶに向かって、アリジゴクが言いました。
「ああ――俺はもう死ぬ。だめみたいだ」
「ひどいじゃないか。やっと自由になれたばかりだというのに！」ものすごく悲しくなって、アリジゴクは叫びました。
「だめだ。もう、目の前が暗く――」
それが、あぶの最後の言葉でした。ぴくん、と体を震わせると、それっきり動かなくなりました。
「なんてひどいこと――」せっかく、友人になれたばかりのあぶの死に、アリジゴクは涙しました。力を失ったあぶの体は、ずりずりと巣の中央に向かってずり落ちてきます。
アリジゴクは本能に勝てませんでした。さっきまで友人だったあぶの、殺虫剤がたっぷりとかかった体に食いついたのです。
そして、アリジゴクもまた、数分後に命を落としました。
ある晴れた、春の一日の出来事でした。

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3054m/

あぶとアリジゴク

2010年10月15日20時31分発行